

第75回全国英語教育研究大会（全英連和歌山大会）に参加して

徳島県立徳島商業高等学校 伊原 直宏

1 はじめに

令和7年11月14日（金）、15日（土）の2日間、和歌山県民文化会館と和歌山県立向陽中学校・高等学校で開催された第75回全国英語教育研究大会（和歌山大会）に参加させていただいた。「学びのWAをつなぐ英語教育－新しい時代を主体的に生き抜く Lifelong Learners の育成を目指して」を大会テーマを柱に、「生涯にわたって学び続ける人材」の育成を目指す実践について学ぶことができた。生成AIが大きな影響を世界に与える今日、英語教育も大きく変化していく可能性を感じる中で、Lifelong Learners を育てる重要性について考えるきっかけを与えていただいた。今回はその内容を紹介させていただき、共有していただければと思う。

2 基調講演

「学びのWAをつなぐ英語教育－『ことば』と『こころ』が離れない授業をめざして」

大阪教育大学 多文化教育系 教授 加賀田哲也先生

基調講演では大阪教育大学の加賀田先生の講演を拝聴した。加賀田先生からは主に「人間形成的な外国語教育 Humanistic-Language-Teaching(HLT)」についてお話を聞くことができた。ことばの教育や外国語教育が児童・生徒の「人間形成」にいかに関与できるか、英語教育を通して「人を育てる」とはどのようなことか、というように人間教育の観点から英語教育を捉え直すことを、加賀田先生は研究主題にされていた。HLTは「人間として成長すること」と「他者と深くつながること」を目的として、学習者一人ひとりの個性・感情・内的動機付けを重視しながら、全人格的な成長を促す外国語指導法であるといいます。言語活動を通して、①言語技能の習得、②自己理解・他者理解の促進・深化、③関係性の構築、を3つの目標に据えており、デジタル時代に突入した現状を鑑みて（特に現在は生成AIへの反動として）、HLTが今重要な指導法ではないか、と先生は説明してくださりました。

中でも、加賀田先生の「学習者の発話を真摯に支援することが大切であり、機械的な褒め言葉は良くない。児童・生徒たちはなけなしの英語を使っているのだから。」という言葉が印象的だった。これまでに先生が実践してきた、“I am special.”というテーマで中学生が書いた英語詩の作品をいくつか示してくださりながら、HLTの視点から行う言語活動の設計ポイントを5つ紹介してくれた。①自己理解を深める、②他者との関係性を意識する（＝自分の良さや可能性を認識するには、「他者の存在」が不可欠であり、それによって学習者ひとりでは到達できない領域へ導くことができる。）、③価値観を高める、④創造性を高める、⑤地球市民としての意識を高める。

一つ一つの言葉の定義を私自身が理解できているわけではもちろんないが、英語教育をより一層人間的観点から考えることの大切さについて、考えることができ、英語教育の可能性や素晴らしさを改め

て教えていただいた。

3 授業実演

(1) 小学校実演授業：和歌山市立岡崎小学校 横矢晴美先生

横矢先生は今回の授業を「あこがれの人について友だちと伝え合い、魅力やしたことがより伝わるように表現を工夫しよう。」という目標で行われた。スポーツ選手や歴史上の偉人など自分の **My Hero** として相手に紹介する言語活動をされていた。相手の話に対して、**Wow. / That's nice. / I see. / Really?**などの相づち表現や、**Is she friendly? / Can he run fast?**のような単語を置き換えれば、生徒たちも使うことができる質問を指導されながら、児童たちが英語を使って考えや情報を伝えようとする様子を見ることができた。既習表現が黒板にも示されており、苦手な児童たちは黒板を見ながら、やり取りをしていた。新出語句として、**creative, famous, gentle, popular, saved, won** といった言葉を挙げられていたが、小学6年生でもこういった表現に触れ学んでいることを認識し、それらの表現を高校生となる私自身が教える生徒たちが当たり前のように使うことができること、そして高校段階で学ぶ表現が定着するような授業づくりを目指して、小学校・中学校からの積み上げを言語面で行っていかねばならないと痛感した。

(2) 中学校実演授業：みなべ町立南部中学校 虎伏泰資先生

虎伏先生は、今回の授業でミニ・ディベートの活動を通して、比較表現を用いながら事実や自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いて、質問や反論を交えながらやり取りできるようになることを目標に、授業を展開されていた。帯活動では **Small Talk** でペアとやり取りしたり、生徒と虎伏先生のやり取りも英語で行ったりと、基本的に英語で授業を展開し、生徒たちとのインタラクションを重ねていた。主な言語活動となったミニ・ディベートでは、**Club activities are not necessary for junior high school.** というテーマに対して、賛成・反対のそれぞれの意見を考え伝え合う活動を行っていた。帯活動での **Small Talk** や、途中に行った教科書のリーディングを通して「部活動」をテーマにした言葉に触れながら、その是非について生徒たちは表現しようとしていた。出てくる意見を全体に共有する際も、たとえば **We feel too much pressure.** という意見に対して虎伏先生が **From who?** と問いかけたり、“**I think teacher must go to club.**” に対して、“**Some teachers like club activity. How about others?**” と問いかけたりしながら、やり取りを生徒たちに示していた。また繰り返し、“**Think in the other way.**” のように他者視点から自分の意見を俯瞰することを促し、思考力の育成を図っていた。ステージ上での実演授業ということで緊張感もある中だったと推察するが、粘り強く生徒たちとやり取りし、生徒がなんとかして伝えようという姿勢にととても感心した。授業後に虎伏先生が仰っていた、「英語の授業を楽しみたい、というのは誰よりも大切にしたい」「子どもたちがどう考えるか、というのを大切にしたい。色んな人に助けられながらというプロセスを通して考えてほしかった」という言葉が印象的で、日々粘り強く生徒たちに向き合われていることが容易に想像でき、励みになった。

（３）高校実演授業：和歌山県立耐久高等学校 岩崎祐矢先生

岩崎先生は、生徒たちの「教え合い」を大切にしたい授業を目指して実践していただいた。“When do you feel love?”という質問に対して自分自身の考えをどのような英語で書いたり話したりして伝えられるか、というのが今回の授業の主な言語活動であった。

世界がコロナ禍を経験していた時に、当時の生徒たちが、苦しみ様子を見て、誰一人取り残さないような空間を授業の中で作りたいというモチベーションで授業を行っており、生徒一人ではできない、誰かと関わりながら行うタスクを設定できるよう日々考えられているようだ。

自分自身の考えを表現できるようになった生徒は教室の前に張られたリストにある自分の名前をチェックし、まだチェックがついていない級友を確認し、その生徒が自分の考えを表現できるように可能な教え合いを行っていた。その後も「普段言葉を交わしていない人にインタビューしよう」といった言葉がけに岩崎先生の授業への思いを垣間見ることができた。

４ 分科会

（１）第１３分科会：兵庫県立姫路商業高等学校 瓜生万美子先生

指導助言者：金沢星稜大学 前田昌寛先生

「専門高校における英語教育の多面的展開－主体的な言語活動を中心とした授業構成の取り組み」

瓜生先生は、生徒たちが英語に対して苦手意識を抱いていること、しかし授業態度が真面目でグループワークなど他者との協働を通して克服に取り組めることに期待していた。またアンケートを通して、特に単語・熟語、文法に対する苦手意識を把握し、日々の授業実践を行われた。

授業の基本的な流れは、１ 予習（ノートへの本文の書き写しや新出語句の意味調べ）の取り組み確認、２ 本文のリスニング、３ 新出単語の発音確認と発音指導、４ 本文内容の導入（YouTube などの活用）、５ グループワーク（①リーダー決め、②英問英答、③音読練習、④本文の文法確認）だ。

発表の中で、流れの一つ一つの活動について説明を加えて下さったのだが、印象的だった説明があった。それは５②においては、本文の内容理解を深める問いを習熟度の違いを意識して作成しており、生成 AI を活用しているということだ。例えば、What will automatic driving do?という問いと How will automatic driving benefit society?という問いが用意されており、どちらも同じ答えに行き着く。このように様々な英文法・語彙を用いた質問文を用意し、英語の習熟度別のアプローチを意識されていた。さらに音読練習の際に用いるプリントでは、裏面に本文の一部を空欄にしたタイプも用意し、生徒のレベルに合わせて負荷を加えられるような手間もされていた。

また、生徒が本文の中で理解が難しい英文を各自で取り上げ、グループの中で教え合う時間も設けられている。解決した後はクラスでも共有することがあるそうだが、will be able to を使う時に、なぜ can ではダメなのかを説明する生徒の様子を映像で見せていただいたが、アンケートでも生徒たちは文法解説を求めているようだ。

今回の発表内容の実践の中で、瓜生先生の気づきと可能性をあげていた。グループでの教えあいを通して、連帯感・責任感を育みながら内容や英文への理解を深めることが可能だということ。挑戦する雰

困気が生まれ、学習意欲の向上が見られていること、などだ。一方、課題としては、グループワークが苦手な生徒への配慮が必要であったり、英語での言語活動の実施時間の確保であったりを話されていた。

指導助言（前田先生より）

- ・各学習者が自分自身の学習に責任を持つことが大切。例えばペンの色を変えて、その部分は自分自身で理解できた箇所なのか、他者によって理解できたところなのか、把握させるなどはどうか。
- ・文法解説の際には、3つの言語要素を考えることが必要。「形式」「意味」「言語機能」。中でも、例えば **will be able to** はどのような場面で使われるのかを生徒たちが理解することで、将来自分で判断してその表現を使えるような「自律した学習者」になることを目指した指導へ。

（２）第２５分科会：和歌山県立熊野高校 榎本三紀子先生

指導助言者：立命館大学 山下美朋先生

「生徒の自己調整力を伸ばし、主体的に学習に取り組む態度につなげる生成 AI を活用した表現活動について」

榎本先生は今回、外国語習得への影響力がより一層予想される生成 AI を用いた、授業実践について発表して下さった。その研究の目的は、「生徒の自律的な態度の育成」と「教員のフィードバックの効率化」だった。

「英語デジタル」という学校設定科目の中で行う「書くこと」の活動の中で、どのように生成 AI を用いたかを紹介されていた。「My Favorite Music Video」という自分のお気に入りの音楽について説明するライティング活動の中で、生成 AI の Copilot を活用されていた。生徒が自力で書いた英文に対して、Copilot に評価させていた。先生が指示されたプロンプトの例は次のような内容であった。

「ライティングの評価ルーブリックです。この２点に基づき、「My Favorite Music Video」を評価してください。各項目は 10 点で、合計は 20 点です。各項目で、改善点や強みについても具体的に述べてください。1.知識、技能 Accuracy①スペルや句読点が正確である②他の人にとって興味のわく内容である③表現が自然である（生成 AI にたよっていない）」

「-Divide the original text into sections; Introduction, Body, and Conclusion, and correct the text.

-Make a table with four columns; section, original, corrected and Japanese.

-Highlight the corrected text in the corrected rows.」

（＊日本語部分、英語部分に分けた理由は不明）

興味深かったのは、Copilot に表でのフィードバックをさせ、パラグラフ構成に適切に行えているかを生徒に確認させていることと、間違い部分を AI が直すのではなく、AI が間違い箇所を指摘し、生徒が正しい英語についてもう一度考える機会を与えていることだ。

このように Copilot を用いて中間指導を行った後、書き直した文章を「知・技/思判表/主/Total」を 10 点満点で評価されていた。今回の研究に際して、評価者は榎本先生・Copilot・生徒自身の三者で評価し、その差を比較されていた。榎本先生の分析が大変参考になったので記しておく。

「知・技」は生徒が一番 Critical に評価していること、「思判表」について、教員（榎本先生）は個人の

意見やエピソードが入っていると高くなること、「主体的」について、Copilot は優しめですぐに 10 点を与える一方、教員は取り組む態度なども考慮し厳しくなる、という分析をされていた。また、生徒の自己評価はブレが大きく、自己評価の高い生徒は高く、低い子は低く評価する。生成 AI の評価にブレはなく、疲れることがない。その一方で主体性にはずいぶん甘い。教員にとっては、生成 AI を 1 つの見方として、評価の補助資料とすることができる。正確性に自信がないので、生成 AI が正確性を評価してくれるのは大幅な時間短縮と作業効率の向上につながった、と仰っていた。

その後に行った生徒へのアンケート調査でも、生徒が生成 AI のフィードバックを前向きに受け取り、次に生かそうという自己調整力や主体的な態度の成長が見られたことを報告されていた。

指導助言（山下先生より）

- ・AI は内容面の評価が難しい。たとえば、「他の人にとって興味がわく内容ある」というプロンプトは AI にとっては曖昧であり、その結果「優しめ」な評価をする傾向にある。それに対して Human Teacher は読者の視点、具体性、論理性、テーマの妥当性、生徒の取り組みを踏まえることが可能なので、AI による校正と教員のフィードバックを榎本先生のように用いることは相乗効果がある。

- ・生徒にとって、AI の提案は受け入れやすいとも言えるので、批判的な視点の醸成が必要

- ・AI 導入のときに考えるべきこと

①自分で書く経験を積む、②わからないところだけ AI や自動翻訳に聞く、③自分で英文を判断できるレベルになったら、自動翻訳を使って、または自分の書いた英文と比較しながら書く、④誰に向けて書くのか、という英文の TPO を意識できるようになったら生成 AI を使う

- ・書いたものは必ず発信（音読発表など）させる

- ・書くことにおいては、AI をありきで考えるのではなく、生徒の実態を踏まえ、どこでいれるか考えることが重要。

5 所感

全体会での基調講演や実演授業、分科会での授業実践報告を通して今回、全国でご活躍される先生方の教育実践から多くのことを学ばせていただいた。現在の、そしてこれからの児童・生徒たちが大人になった時に生きていく社会は、今では想像できない姿に変わっていくかもしれない。英語教育を通してそんな社会を生きていく生徒たちを育てているんだという想いを抱いた。生成 AI のような科学技術の発展は、英語教育の教室の姿も大きく変える可能性を持っているため、生徒たちにとって適切な活用やそのリテラシーも十分に理解し授業で活用する術を学んでいかなければいけない。また同時に、英語教育が変わらず持ち続けるであろう、生徒たちの人生を豊かにできる可能性を失うことなく、これからの授業をより良く向上していきたい。